

明治四十二年九月

史學
研究會 講演集 第二冊

東京 合資會社 富山房發行

史學研究會講演集第二冊



總目次

傳來の淵源 一—四七

西村時彦

長白山附近の地勢及び松花江水源

附完顏城址考 五〇—二六

理學博士 小川琢治

東洋史の研究に就きて 二七—三九

伯爵 大谷光瑞

碧山日録の著者に就きて 三三—五五

上村觀光

雜 錄 一五—二六

貝原益軒と京都地方 文學士 伊東尾四郎

貝原益軒の書翰 文學士 幸田成友

彙 報 二六—三九

碧山日録の著者に就て

會員 上 村 觀 光

南北朝の末から室町時代を通じて五山禪僧の筆録した日記は數種ありますが、今日迄一般史家の間に最も知られてゐるのは南禪寺義堂和尚の空華日工集と相國寺瑞溪周鳳の臥雲日件録、それから蔭涼軒日録等であり、此外に東福寺季弘大叔の蕉軒日録と碧山日録二つがありますが、是等はあまり知られて居りません、伴信友の「史籍年表」にも前の三書は擧げてありますが後の二書は記してないです、空華日工集は原

は空華日用工夫集と名けて四十八冊ありましたが、後に何人か抄録しまして日工畧集と名づけ二冊だけ現存して居りません、是れは正中二年に初まつて嘉慶二年四月に終つてます、次に臥雲日件録は是れも原本は七十四冊ありましたが相國寺光源院の惟安妙安が拔萃しまして二冊より現存して居りませぬ、此は文安三年四月に始まつて文明五年の五月に終つて居らず、蔭涼軒日録は室町幕府の日録とも見るべきもので永享七年頃から起つて文正元年に終つて居りません、是れは相國寺の益之集、龜泉集、證季瓊眞藁等の筆録したもので、主として將軍家に關する事柄が多いのです、彼の永享日録とか、季瓊日録とか、龜泉日録とか申すのは是の蔭涼軒日録の或部分を申したので、此れ等の日録を綜合すれば蔭涼軒日録となるの

であります、又、鹿苑日録と申すのがありますが是れは鹿苑院僧録の日録で原本は東京大學に藏せられてあつて私はまだ内容を見ませぬから詳しく申上げることは出来ませぬ、それから碧山日録と蕉軒日録でありますが、碧山日録は次に申述べますから略しまして蕉軒日録は文明十二年に始まつて同く十八年の十二月に盡きて居りませぬ、それで空華日工集と臥雲日件録、碧山日録、蕉軒日録の四點は箇人の日記でありますから一般歴史の材料にならぬ事柄が間々ある代りに餘程面白味がありません、之に反して蔭涼軒日録の如きは幕府の日録ですから史實に富て居る代りに随分無味乾淡の事柄が多くあります。空華日工集の著者義堂は足利義滿を輔佐した位の人ですから、當時の五山では中々に勢力もあり學殖も深く見

聞も博く殊に思慮の綿密な人であつた様で、又來往の人々が當時高名の人々でありましたから中々有益な事柄が記載せられてあります、臥雲日件録の著者瑞溪も當時は僧録で中々の派利きでありましたし、又深き讀書趣味を持つて居た人ですから其の記載の事柄は當時の文學上非常に参考になる點があります、季弘の蔗軒日録は碧山日録と其の内容は伯仲の間にある物ですが季弘は東福にも南禪にも住山した人だけあつて、五山に關する事實は多い様です、碧山日録の著者は五山にも住せず十刹にも補せられず平僧で一生了つたから、毎日あちらこちらと出あるき、途中の見聞なぞを記して、就中應仁亂につきては色々と其有様を記して居りますから、一面からは當時の風俗を知るに都合よく、前の三日録に比して一種

の特長を持つて居る様に思はれます、此外にまた鳳林承章の隔明記とか、策彦の初渡、再渡の日記とか種々ありますが、これは本題にあまり関係のないことですから詳述することは略しまして、碧山日録の著者に就て愚見の大體を申述べ様と思ひます。

碧山日録は『史籍集覽』の第二十五冊に百三十丁より三百四十五丁に涉つて載せてあります、是れは舊東福寺龍眠菴の所藏であつたのが後に前田侯爵家の藏本となり、侯爵家の藏本に據て東京大學が影寫せられたものに依て活刷に附せられたのであります、此の日録は長祿三年正月に始まり應仁二年十二月に終つて、丁度十ヶ年間の日記であります、而して別冊に成て居ります、『史籍集覽』の解題の中に其の八十丁の所に碧山

日録の解題が載つて居りまして、左の如く記してあります、

碧山日録 五卷

僧碧山自筆の零本五冊、前田家に藏せらる、長祿三年より應仁二年に至れる日記にして此書即ちそれなり、然れども長祿三年と應仁二年を除きては皆殘欠なりし、今東京帝國大學所藏の影本に依てこゝに收めたり、と

扱て碧山日録の全部を讀みますると惠山又は本寺などと書して東福寺の事柄が澤山記してあります、其他當時の五山僧と關係の事も見えます、依て當時の五山僧中に碧山と申す文字に長じた人があつたかと段々詮索を致しましたが見當りませぬ、依て東福寺に就て聞き質しました所が碧山と云ふのは碧玉山正覺菴の事であるまいか、從來正覺菴を碧山々々と

申して居ると云ふことだけを聞きました。

爰に於て解題に碧山和尚とあるは愈々間違で、何人が外に著者が無ければならぬと思ひまして、著者の穿鑿に取掛りまして併し何等の手懸りが御座りませぬ、一面東京の辻史料編纂官へも碧山日録の著者は大學で既に調べがついて居るや否やを問ひました所が同君よりも「碧山日録の著者詳ならず聖琳と申す人の著ならんとのことに候へど不確候」との返書を得て失望しました、致方がありませぬから再び碧山日録を精讀しました所が長祿三年十一月六日の條に至りて

六日甲申、立兄工彫鑄於印文、余以雲泉野衲之字、需之、兄乃許諾矣

とあるのを見まして始めて別號を雲泉と稱する人であると

云ことだけ分りました、併しまだ是れだけでは一向要領を得ませぬので段々讀で参りますると遂に長祿四年閏九月即ち寛正元年九月二日の條に

二日乙巳文安乙丑之正月、余侍伏見之退藏於勗仲、勗仲以偈見示、於古紙堆中得之、其叙曰、太極藏主偶來城南幽居、聚頭分歲、尤愜老懷、矧亦究明已事、爲切、領略本地風光自家田園必矣、作偈祝刹曰

刹々塵々如意輪、季頭佛法甚尖新、分明契卷不離手、萬斛春風屬主人、

とあるのを見まして此の日録の著者が太極藏主であることを發見しました、發見と申すと大層ですがツマリ見出した譯です、此の偈は長祿四年より十六七年の昔に太極が伏見の退

藏院と云ふ寺で勗仲と云ふ老僧に參禪して居た時に、勗仲より與へたものなन्दす、此頃太極は二十五歳より六歳迄と考へます。

著者が分りましたから次に此の日録は太極が何歳頃の筆録であるか是れが調べたくになりました、段々讀で參りますると應仁二年十二月十六日の條に於て

是日立春、餘既享年四十九

とあるのを見まして、太極の生年を逆算しました所が、太極は應永二十七年の生れで、此の碧山日録は彼れが四十歳の時に始めて四十九歳の時に終つて居るのであります。

次に太極の師承を調べたくになりまして「惠日山宗派圖」を見ました所が越中の崇聖寺と云ふ寺の關山に竺山至源と云のが

ありまして其の弟子に全璧志蘭と云のがあります、全璧の弟子に虎溪齋遠と云ふのがあつてこの虎溪も矢張越中の崇聖寺に住し又東福寺にも住山して同寺の百九世に列して居られます、歿年は分りませぬが同寺の歴代住持籍に依て推測しますと永享年間に遷化されてある様に思ひます、太極は此の虎溪の弟子と云ふことに成て、矢張り同しく越中の崇聖寺に住したことに系圖が成て居ります。

太極は何人に就て學問をしたかと申しまするに、前に挙げました退藏院の昃仲には參禪しただけで主として建仁寺の瑞巖龍惺に就て學んだかと思ひます、夫れは碧山日録の長祿四年九月五日の條に

瑞岩和尚入滅、余出入和尚之門二十餘年、慈誨善諭所沾不少

也、是以哀感不減、諸弟即赴哭於龕前、

とあります、瑞岩は當時五山にては高名の僧で、語錄(三冊)の外に蟬菴外稿と云ふ詩集があります、其の外稿の中に太極のことが二箇所見えます、無用の様であります、が後日の便宜上此に記して置きます、

次韻太極賢佞咏雪

漫天飛雪散瓊絲、過訪期君共咏雪、美景難逢急行樂、人生俯仰作綠髭、

一夕朔吹攪林、飛雪打窓而無□共言詩者、唯獨吟消永夜耳、
明日太極賢佞寄詩統子(正宗體統のこ)輒和以付來使

威平處士髭如絲、千古名高兩句詩、詩比昔人君更巧、雪時撚斷數莖髭、

茲で一寸申して置くことがあります、賢佞の佞は「稚子候門ノ心ゾ」と雲挑抄にも釋してありますから若い僧と云ふ意味に取つたらよからうと思ふのです、上に述べました如く、余、和尚の門に出入する二十餘年とありますから、永亨の末から出入し始めた者と見えます、即ち太極の二十歳頃に當ります、次に又長祿三年二月十三日の條にも清原清忠に就て論語、孟子、尙書、詩經、左傳等を學んだとが記してあります、又後年に至りましては雲章一慶等持院の竺運等蓮等の百丈清規や漢書の講筵に列したことが記してあり、建仁寺の九淵龍賒にも師事した様子が見えます。

太極の平素最も親しくして居たのは東福寺の季弘大叔と同寺塔頭永安院の惟精見進の二人で、其外に建仁寺の正宗龍統

東福寺の華岳建胃、儒者では清原常忠、歌人では栗棘菴の清巖正徹書記等であります、併し徹書記は長祿三年五月九日に七十九歳で寂したことを同く十一日の條に書いて居りますから是れ以後に交はつたことはありますまい。太極は又其の日録の中に寛正三年五月四日と同年八月五日の條に「爲諸子講杜詩」と記して居りますから、東福寺の若僧等を集めて壯詩の講を開いたものと思ひます。

次に此の碧山日録の草案を友人に見せて字句の批評を求めたこともあつたと見へて長祿三年三月二日の條に

問、綴惟精於靈泉對床而談、正宗又至、出予之日録以商略焉、とあります、又長祿四年四月八日の條にも

余去春、以日録數冊、求忠公之鑑、

とあります、忠公は清原業忠を申したのであります、是で見ま
すると太極は碧山日録の文章や日録中の詩偈を先輩又は友
人に見せて是正して貰つた様に思はれます。

又此の碧山日録には一條兼良公が序文を書いて與へられた
様で、日録の應仁二年三月七日の條に

前關白一條殿下、賜碧山日録之序一篇

とあります、同月の十五日の條にも

與左太史長公、賜一條殿下、謝賜日録序、

とあるのを見ますと此の日録には序文があつたこと、思ひ
ます、是の前關白一條殿下は一條家の系圖に依て考ますと彼
の有名なる一條兼良公に當るのであります、兼良公は桃華老
人又は三關野老人とも稱せられて文明十三年に八十歳で薨

せられた方で、恰も此の日録の序文を書かれた時が六十七歳に當ります、彼の正徹書記の歌集草根集にも兼良公が序文を書て居られます。

次に太極は當時相應に詩文の作者であつた様に想像されま
す、それは應仁二年五月六日の條に

前板首座見求余之製淋汗幹縁之疏拒辭再三請不已矣

とあります、次に九日の條に

問季弘於長樂出淋汗之疏而求其品判也

とあり、又十日の條にも

謁常喜和尚亦出拙語受慈教(常喜を指す)

とあり、同く十三日の條にも「淨書淋汗化疏」と記し、其の作疏の全文を記載して居ります、茲で一寸申上げねばならぬことは

五山で疏を作る人は多くは西堂以上の人であります、中には藏主位の人で作るのもあります、彼の相國寺の興彦龍の如き建仁寺の楞元方の如きがありますが是等は異數です、それで太極は此頃には既に西堂の位になつて居りはせなんだかとも思はれます、彼の藏主であつた文安二年から既に十五六年も過ぎて居りますから或は西堂位であつたかとも思はれません、又季弘大淑の蕉軒日録文明十八年八月四日の條を見ますると、

昨日雨中入^{充子}寮戲^寮開^机上^{册子}而見^之、亂中惠山之諸友相偕所作之聯句詩、在此册中、太周、太極、郁文伯、湖梅西等諸友也、此四人皆逝矣、其外存者、僅愚老一人、愚在田舍、加以病、雖存非存、不覺讀之一潛然、太極與余同甲也、亂中、南禪瑞要西堂竺關、

和先祖慈氏和尚與普明國師雖字和答、四五十首八句也、各求
和一首、月建及愚亦和一首、太極四。五。日。之。際。和。者。五。十。首。一。代。
之。絕。作。也、其中妙語奇對不爲不多、月建和尚絕賞特甚、餘求其
草稿於太極秘之好事之人奪之、今失其人之名、雖求不可得、恐
竺關猶得蓄之乎、充子爾年猶少、他日求於竺關之左右、寫而留
則可矣、可以傳於後也、云々

とあります、是れで考へましても太極は當時諸友の間から作
者を以て推獎を得て居つたことが分ります。

次に太極は餘程能書であつた様で、日録の中に醍醐の三寶院
の僧正から聖濟總録の不足を謄寫して呉れぬかと頼まれた
が斷つたこと、後にあまり頼まれるので其の初卷だけ寫した
こと、菊阿と云ふ人から扁額の揮毫を頼まれたこと、雲章一慶

の語録を淨書したことが記してあります。

次に碧山日録を讀みますると、木幡より靈隱に歸るとか或は靈雲に歸るとばかりありまして碧山に歸ると云ふことは一箇所も見へませぬ、靈雲と申すは今も東福寺にあります、是れは彼の有名なる岐陽の不二菴を後に靈雲と稱したので、太極當時の靈雲は當時不二菴の境内に小菴があつたと云ふことでありませぬ、靈隱は靈雲の變名か、或は別寺か分りませぬが兎に角文章の鹽梅から推測しましても東福寺の境内にあつたものと思はれます、而して日録の中に碧山の語はたつた二箇所よりありませぬ、長祿三年五月七日の條に

攤、朽、冊、於、碧、山、窓、下、得、往、年、予、之、所、賦、偈、頌、若、干、篇、

とありまして、又應仁二年二月五日の條に

滕公來、寄惠礫石印函、以他適不相接。

と記し、同く八日の條に

應子春仲五日、陽留居士滕公のこと問、予碧山、而值不在、留意於門丁、又頒惠以礫石印函一枚。

とあります、是れで考へますと、太極は碧山にも居り、又靈隱や靈雲を兼務して居たかと想像せられます、其の他から歸つた時を記したには多くは靈雲又は靈隱と記して居るにも拘らず、蟲干をしたり、珍客の來訪には碧山と記して居る所を見ますると彼れの本住院は碧玉山であつたかと想像します、是れで前に申上げた如く碧山が人の名でなくて、寺の山號であることは一層明瞭に成た事と存じます。

太極には碧山日録の外に押韻集と云ふ著述があります、それ

は前に申上げた太極の親友の季弘太叔の文集に蕉菴遺稿一冊があつて、其の遺稿中に「書押韻後」と云ふ一文があります。この押韻集は太極の著述で、太極が應仁の亂を避けて何れへか逃れて居た中に、日々諸書を涉獵して其中から偈頌や詩句の妙所を摘録したものであります。季弘の文中に「太極之此作也、偈頌以吾徒之先務、實之於首、詩之興句、岐而作二、而次焉。摘語甚簡、觸類而分、可謂能知所擇焉」とあります。是れて押韻集の内容が分ります。此集の跋文は季弘が文明四年に書いたものであります。其の初めに

我友太極、遭世方擾、避兵山中、杜絕人事、四換青黃、

とあります。應仁は二年で終つて翌年は文明元年であります。文明四年に書いた文に「四換青黃」とありますから文明元年か

ら太極は京師の亂を避けて何れへか參つて居たらしく思は
れます、碧山日録は應仁二年の十二月に終つて居りますから
其後のことは分りませぬが「遷世方亂、避兵山中」とあるより見
ますると或は江州邊にでも避難して居たかと思はれます、申
す迄もなく應仁の大亂は京都至る所大變な騷擾で東西兩陣
の大戦につれて、白晝諸所に盜賊が横行し、現に碧山日録にも
東福寺へ賊が入て北谷の寺の住僧が何れへか避難したことを
記して居ります、日録の應仁二年八月二十八日の條に

十四日、自西兵入本寺、常喜、法幢、長慶、本成之諸老、及長幼之徒
數百員悉下山而去、鐘鼓止響、香燈絕光、欠晨誦晚參之勤、邊東
戎卒狼籍於諸堂、屠肉庫下、繫馬廊間、行力未逃者、跼蹐只恐殺
戮而已、其暴虐不可言、

とあります、右様の有様ですから、太極も迎も東福寺には居られなんだことと思はれます、此の當時の五山僧徒は多く東江州に避難をして居り、彼の有名なる相國寺の横川景三も應仁元年の八月に桃源瑞仙や景徐周麟と共に江州の永源寺に亂を避けて居ります、其時の文集に東游集と云ふ一冊があります、それを見ますと江州邊にも賊徒が横行して居つた様であります。

最後に一つ申上げねばならぬことは、初めに挙げました解題の中に「零本五冊」と云ふこと、長祿三年と應仁二年を除きては皆殘欠なりしと記してありますが、是は何も證據のないこととて、果して零本であるか、殘欠であるかは判断に苦むのであります、現に瑞溪周鳳の臥雲日件録でも瑞溪が五十五歳の時

に始めたもので、日件録の巻首にも

文安三年三月晦、予退崇壽、移壽星軒、退圃無事、記日用事、名曰
日件録云々

とあます、即ち瑞溪が功成り名遂げて退隱後、無事の餘に記したもので、又季弘の蕉軒日録でも彼れが東福寺を退院後、漸く文明十二年から記し始めたもので、彼れは同く十九年に寂して居ります、何も日録は若い時分から記述するに極まつて居りませぬ、然れば此の碧山日録も何の根據もなくして、零本とか殘欠と云ふことは出来ませぬ、私は寧ろ是れだけのものかと思ひます、零本とか殘欠とか斷定するよりも此の見定めが適當の如く思はれず。

以上述べました所で、碧山日録の著者は太極藏主と云ふ東福

寺の僧で雅號を雲泉と稱した人であると云ふことだけは御
了解に成たことと存じますが、然れば今日の講演の目的は不束
ながら一應達したのでありますから是れで御免を蒙ります、